

学位論文題名

「ヤマギシ会」と家族

—近代化・共同体・現代日本文化—

学位論文内容の要旨

1) 本論文の構成

まえがき

序章 研究の視座と方法 13 頁

第Ⅰ部 共同体文化の位相

第1章 共同体文化論 25 頁

第2章 現代型共同体誕生の契機 55 頁

第Ⅱ部 共同体「ヤマギシ会」の分析

第3章 「ヤマギシ会」の発生と実態 101 頁

第4章 「ヤマギシ会」の周辺〈調査分析〉 139 頁

第Ⅲ部 結び

終章 共同体「ヤマギシ会」にみる現代日本文化の位相 201 頁

引用・参考文献一覧

(400 字詰め原稿用紙約 587 枚相当)

2) 本論文の観点と方法

本論文は『「ヤマギシ会」と家族——近代化・共同体・現代日本文化』として、2006 年 4 月に慧文社から既に刊行されたものである。研究対象は、幸福会ヤマギシ会という団体である。ヤマギシ会は山岸巳代蔵により 1953 年に設立された山岸式養鶏法普及会を基として、独特な生活理念を共にするもの達が農事組合法人を作り、全国各地にヤマギシズム社会実顕地という農村共同体を作った団体である。最盛期には、40 カ所近くの実顕地と 5000 人程の村人、10 万人あまりの会員を有する世界有数のコミュン運動であった。しかし、1 週間の特別講習研鑽会における精神操作、村人になる際にヤマギシ会に委託した個人の資産が脱会時に返還されないこと、親と子を別々に住まわせて子供を養育係が集団教育するなどの諸点において、日弁連が 1999 年に人権侵害が強く疑われるとして勧告書を出すなど、社会問題性の強い団体である。黒田氏はヤマギシ会の実態調査（特別研鑽会や各実顕地へ

の参与観察、脱会者対象の調査票調査)を通して、①ヤマギシ会が1980年代に急速に成長を遂げた背景を探り、②ヤマギシ会が実現しようとした現代型共同体(黒田氏の命名による)の達成と限界についての知見を得ようとした。

### 3) 本論文の内容

本論文は1994年から約10年間にわたる黒田氏の研究成果をまとめたものである。その内容については、修士学位論文『コミュニケーション型社会生活の実証的研究——「ヤマギシ会」を中心に——』を皮切りに学会発表や研究論文(『社会分析』24, 25, 26各号に掲載、『現代の社会病理』13号に掲載)において継続的に再考を重ねてきたものである。

研究目的は、近代化という社会変動によって生み出された現代日本文化(教育・家族)に照らして、現代人の葛藤を見つめることにある。調査方法としては、共同体生活の場として三重県・和歌山県・熊本県・徳島県にあるヤマギシ村での参与観察と「ヤマギシ会」に関わった人々へのインタビューならびに2度にわたるアンケート調査を実施している。

本論の構成は、第Ⅰ部を「共同体文化の位相」(理論検証)、第Ⅱ部を「共同体『ヤマギシ会』の分析」(現状分析)、第Ⅲ部を「むずび」(結論)として3部で構成され、全6章(序・1・2・3・4・終)で展開している。以下に各章各節の概要を述べる。

まず、第Ⅰ部は第1章「共同体文化論」と第2章「現代型共同体誕生の契機」で構成される。第1章は、本論に関する「共同体」の先行研究をまとめて述べたものである。ここでは、まず「共同体」と「文化」という広範で曖昧な言葉の概念・定義を整理し、諸外国ならびに日本における主な共同体の歴史と生活を文献より得られた情報により述べた。また、共同体の一例として、黒田が2001年にフィールド調査を行った中国の共同体(韓村河)を写真とともに紹介した。次に、第2章では「社会変動」を「近代化」という歴史的媒介要因の視点から見つめ、近代化が「家族」や「地域」、「経済」や「宗教」にもたらしたシステムの変化を主に富永健一の理論を援用しながら考察した。そこでは「核家族化」、「都市化」、「業績主義」、「世俗化」などの新システムの誕生とともに、個人が「私化」していく様と宗教的でも社会主義的でもない新たな「共同体」誕生の要因があることが述べられた。

第Ⅱ部は、第3章『「ヤマギシ会」の発生と実態』と第4章『「ヤマギシ会」の周辺〈調査分析〉』で構成される。まず、第3章では、ヤマギシ会の成立と歴史、その生活実態、運動内容などを現地調査から得られたデータをもとに記述した。そして、生活実態では、質の異なる3つのヤマギシ村(三重県・和歌山県・徳島県)の様子を記した。また、黒田自身が体験したヤマギシ会のセミナーの内容を具体的に述べた。次に第4章では、これまで実施した2度のアンケート調査で得られた量的・質的データを分析し、一定の仮説を引き出した。本論のアンケートは、反「ヤマギシ会」とも位置づけられる団体:「ヤマギシ会を考えるネットワーク」の会員を対象に郵送式で実施したもので、有効回答数118で回収率は48%であった。そこでは主に脱会者の脱会時の葛藤ならびに1990年前後よりはじまる会員達の著しい接触と乖離(質的・量的変遷)を考察した。

第Ⅲ部は、第Ⅰ部の理論と第Ⅱ部のフィールド調査分析結果を踏まえての「むすび」として終章「共同体『ヤマギシ会』にみる現代日本文化の位相」である。本章では、1953年に発生した「ヤマギシ会」が今日までの約50年の間に幾多のバッシングがありながらも存続している理由―世俗的な集団としての強み―を述べた。

さらにデータより得られた仮説として、①ヤマギシ会参画者の顔（質的なもの）が1990年前後より変わってきているということ。②それに付随して「ヤマギシ会」という共同体にはその歴史の前半部分で見られたような対抗文化的色合いや草の根運動（たとえば一時期みられた環境保全運動など）的な影が薄くなっていること。③現在は家族的機能をもつ「一大家族」のような存在であると会自身が世間一般にアピールしているということ。④その「一大家族」というキャッチフレーズこそが悲劇を生んでいること。⑤その悲劇とは共同体「ヤマギシ会」を「家族」と同一視し、そこにノスタルジックな家族―「前近代的家族」―を求めて参画する現代人が少なくないことにあった。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 櫻 井 義 秀  
副 査 教 授 松 岡 昌 則  
副 査 准教授 佐々木 啓

学 位 論 文 題 名

## 「ヤマギシ会」と家族

－近代化・共同体・現代日本文化－

### 1) 本論文の研究成果

①日本の社会運動研究はもとより、新宗教研究においてもヤマギシ会を本論文ほど広範に扱った調査研究は存在しなかった。もちろん、島田裕巳の最初の著作『フィールドとしての宗教体験』（1989）はヤマギシ会への体験入会をベースに書かれたものであるが、当時の新宗教研究や一部の人類学に顕著であった考え方、つまり、研究者の体験や共感的理解を元に議論を構築するやり方であった。この方法がオウム真理教のようなカルト集団に全く通用しないことは、中沢新一と共に島田自身が体験的に理解したところである。しかし、その後、現代宗教研究において調査法の方法論的検討や革新が進められてきたわけではない。そのような状況のなかで、社会問題化する教団には近づかない研究者が多いにもかかわらず、黒田が単独で十年間にわたりヤマギシ会の調査研究を継続し、研究成果を公表したことの学問的意義は大きいと考えられる。

②著者の知見において特筆すべきものは、社会運動の安定化戦略が生み出した不安定要因の発生という指摘である。ヤマギシ会について述べれば、独特な共産主義の理念を有していた山岸巳代蔵や他の農民達に学生運動経験者達が加わることで運動は先鋭化した。しかし、実顕地を拡大してヤマギシズム社会改革を実現するためには一般の市民も運動参画者に加える必要があり、ヤマギシの有機農業（自然食品愛好者）、放って育てる（管理教育や学歴社会に批判的な親達）、大家族主義（家族問題で悩める人達）に共鳴する市民を取り込むことで、事業の経営基盤と人的資源を安定化させた。ところで、資産を有する都市中間層をヤマギシの村人にするためには、所有財産の放棄や家族生活を断念することを研鑽会や指導において迫り、運動体のメンバーとして単身者（活動家）の文化を内面化する必要があった。徹底した共同体主義は家族や個人を否定するものとなるが、それに抵抗する村人や人権意識を高めた現代社会との軋轢により、ヤマギシ会を内外から批判する運動が展

開することになり、ヤマギシ会は勢力を半減させつつも、なお存続している。

③本書の学術的貢献は極めて高いものの、ヤマギシ会を「現代型共同体」として位置づける考察は日本における農村社会学や歴史研究における共同体論を十分踏まえているとまではいえない。社会学の学説史をなぞる記述も見られる。また、事例の記述、分析においても隔靴搔痒の感が否めない表現が随所に見られる。ヤマギシ会が必ずしも情報として開示しない権力構造や、特別研鑽会のプロセス、実顕地における村人の生活実態等には踏み込んだ記述が不足している。しかしながら、この点については口述試験において、各種集会や実顕地での見聞については口外無用である旨を約束して調査を実施せざるをえなかったこと、ヤマギシ会批判者が有形無形の圧力を受けた事実があること等から詳細な記述を躊躇われたことが報告された。研究対象による制約を勘案しながら、ぎりぎりのところで出版公表を行ったことが確認された。本論文の達成と限界についても黒田氏自身十分自覚的であり、そのようなわけで、本委員会では博士論文の質を減じる問題とはみなされなかった。

④調査が非常に困難なコミュニオン組織に対して、長期間の様々な観察法を試み、その成果を公表したことの功績は大と評価すべきものと考えられる。この点に関して、さらに付言するならば、宗教社会学において少なからぬ研究者がいる新宗教研究においては、近年、当該教団に対する批判的視点をもった研究成果が非常に少なく、ややもすると教団の広報に活用されかねないものも多い。現役信者に教義をどの程度内面化しているのか、宗教実践にどのような思いを持っているのかといったことのみ聞けば、教団が世間に伝えたい内容に標準化されることが多くなる。また、教団側もそのような模範的信者を調査対象者として推薦してくることも少なくない。こうした研究状況の中で、本書のように団体組織によりアレンジされた調査状況からではなく、単独の調査者として参与観察し、また、脱会者より組織の実態を調べようとする調査アプローチは今後の調査技法として参照されるべきものと考えられる。

## 2) 学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果から、本審査委員会としては、全員一致で本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。